# はじめての「討論会」

文・写真 天野秀樹
(Amano, Hideki)
学校教育学部3年生

## 挑戦

今年もまた大学祭の季節がやってきた。例年、学生たちがサークルごとに店を出したり、いろいろ思考を凝らしたイベントを催している。本来大学祭は「祭」なのだから、みんなが楽しく盛り上がればそれでよしとするところであるが、今回、学校教育学部では、これまでとは違う新しいプロジェクトを試みることになった。

日時は十一月三日(日)午後四時三十分、場所は学校教育学部大講義室。学校教育学部生を中心とし、地域の方や大学の教授、他学部の大学院生など、教育に関心のある方々が参加しての「討論会」を行った。

なぜ大学祭で「討論会」を行おうと思ったか、簡単に述べると「これから教師になろうとする私たち学教生の意識を高め、教師や学校の本来あるべき姿を考えていこう」というのが、この討論会のねらいである。そして、そのような志気を持った有志が集まり、この討論会を計画していったのである。

もちろん、スタッフ全員このような討論会の経験などないので、最初は何をどう始めていったらよいのかわからない。とりあえず、三週間という限られた時間をフルに活用して、自分たちでできる限りの準備をしようということになった。

## いよいよ本番、テーマは体罰

そして本番。

会場には、約一七〇名が参加し、一時間半にわたって討論が繰り広げられた。

議題は「教育的指導における体罰について」である。今日、体罰についてはマスコミなどにおいても大きく取り上げられており、教育者を目指す私たちにとって、絶対避けては通れない問題である。法的には絶対に許されないにもかかわらず、教育の現場では当たり前のように体罰が行われている。いわゆる「愛のムチ」である。その場合、「体罰」には「教育的意義がある」とされているが、果たしてそれをどう受けとめるべきなのか。

パネリストには、教育的指導として行われた体罰の事例を示し、まずその体罰について賛成、反対に分かれてもらい、それぞれの主張を述べてもらった。その後、これまでの討論を踏まえて、「今後、教師を目指す私たちはどうしていくべきか」を聴衆の意見を交えて討論していった。

スタッフの準備不足を指摘する聴衆からの厳しい意見もあったが、参加者の多くは「自分の意見を再認識できる良い機会であった」と、感想を述べている。また、

盛り上がった討論会場での様子

「このような討論会をぜひまたやってほしい」という声も多数あり、スタッフとしては嬉しい限りである。また、地域の方々からも「教師を志望している学生が、このような機会を設け自分の考えを持っていくことは大いに意義がある」と感想をいただいた。

今回の討論会は学教生を中心としたものだったが、今後はもっと学外の方々にも参加していただけるようなものにしていきたいと考えている。その意味で、このような地域の方の声というのは、これからの活動において大変励みになると思う。

## スタートに立ったばかり

今回、私たちスタッフを含めてこの討論会に参加した人たちは、何か得るものがあったと思う。先にも述べたが、これからより良いものへと発展させていきたいと考えている活動であるので、この討論会の評価をあえて「大成功」とはするまい。私たちにとって今回の「第一回討論会」はスタート地点なのである。

この会の趣旨である『将来教師を目指す者として意識を高め、本来の教育のあり方を考えていこう』を、もっと多くの学生に考えてもらうためにも、第二回、第三回の討論会を開催したい。

最後に、この討論会を行うにあたって、大学の教授や学務の方をはじめ、教育センターの方など多数のご協力が陰にあったことをここで述べておきたい。